

ロールズ正義論

～公正としての正義を考える～

2011 年 12 月 5 日(月)

渡辺 顕誓

- I. はじめに
- II. 正義とはなにか
- III. 戦後アメリカにおけるリベラリズムの流れ
- IV. ロールズの正義論
- V. おわりに

I. はじめに

サンデルの近著『これから正義の話をしよう』は日本に政治哲学ブームを引き起こした。この本は「正義」とは何かについてのサンデルの私見であり、实际的に哲学者の間で統一見解があるわけではない。哲学とは、物事をある見方から解釈するということを積み重ねいく学問であるが、肝心な見方は人によってバラバラなのである。一つの解釈が全てを矛盾なく説明するのであれば、まさに完璧な理論といえるのであろうが、そのようなものは未だ発見されるまでには至っていない。多くの哲学者がこの「正義」という概念の定義をし、追求する手立てを考えてきた。そして、不完全ながらも功績を残してきたのである。

今回取り上げるジョン・ロールズは 1971 年に『正義論』を刊行した人物であり、しばしば「政治哲学の復興」を成し遂げたとされる 20 世紀を代表する政治哲学者である。彼の理論は絶対的とは言わないまでも、以後全ての政治哲学者がそれについての関連を言及しなければならなくなるほど有力な理論であった(スウィフト 2011)。

我々は彼の理論からどのようなことを学び、正義についてどんな見解を見出すことができるだろうか。本勉強会ではロールズの正義の理論を説明しつつ吟味していこうと思う。また、その過程でリベラリズムと諸思想における対立軸を中心に議論を行う。

II. 正義とは何か

○正義なるものは相対的か

正義＝個人の意思決定や判断においても使われる一般用語

正義は相対的？

⇒「人それぞれだから正義もバラバラだよね」では済まない問題

↑

我々は社会の中で共同体を営む社会的動物

○社会正義を議論する

今回扱っていく正義 ＝社会正義 ＝社会の制度や法律の次元における正義

III. 戦後アメリカにおけるリベラリズムの流れ (表 1 参照)

*リベラリズム(自由主義)…自由を最も重要であるとする思想のこと

○反全体主義の思想

リベラリズム＝全体主義を否定するもの

全体主義…単一のイデオロギーによって国家が支配されている状態であり、思想や

信条の自由が弾圧され、民主的手続きによる意思決定がなされない考え方

Q. では、ドイツやイタリア、日本の次に来るアメリカの敵とは？

○トルーマン・ドクトリンと反計画経済

A. ソ連 …自由主義・資本主義の後の世界【共産主義、社会主義、計画経済】

↑

「実はこれらが全体主義を助長するものだ！」とアメリカは主張

(1947年 トルーマン・ドクトリンで反共宣言)

ただ否定しようにも根拠がない Because 実害が今のところないから → 探せばいい

○フリードリヒ・ハイエク『隷従への道』、『自由の条件』

ハイエクは、計画経済を進めると結局は指導者による一元的な決定が行われるようになるとしてこれを否定している。60年の『自由の条件』では特に、人間は「習慣」と「伝統」を積み重ねることによって「進歩」していくのであり、特定の人間の理性的な「設計」では追いつかないことを理由に批判した。また純粋な市場経済については、自らの生活を設計し自立して生活することになるため、自由の精神が鍛えられるとしこれを推奨する。この立場をネオリベラリズム(新自由主義; 経済的自由主義)といい、政府はできる限り市場に介入しない小さな政府を主張する。

○ハンナ・アーレント『全体主義の起源』、『革命について』

ハンナ・アーレントは、特に当時のスターリン的な全体主義について批判した。この世界には、様々なタイプの人びとが存在し、相互に作用することによって絶えず変化している。本来の意味での自由は、人びとがお互いに意見が異なることを認知し、それを前提として多様なコミュニケーションを展開する「余地」がある社会で実現される、と考えた。古代ギリシャにおける日常的に行われていた議論を想定してもらえるとわかりやすい。皆が私的利益の追求をするのではなく公共の利益について論じる、それを体現するのが政治の場であると考えていたのである。

*「スターリンの統率は、強力な個人崇拜やプロパガンダによって強固なものとなり、結果としてソ連の大多数の人々によって英雄とみなされた」(Stalin Nostalgia)。

○ベトナム戦争への介入

55年のアジア・アフリカ会議以後、第三世界の存在感がUP



これをめぐって ソ連 vs アメリカ

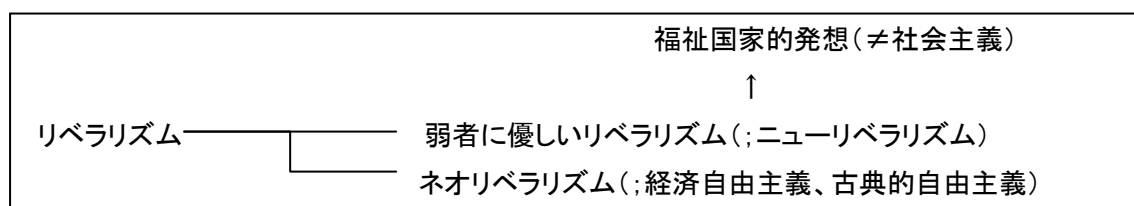
@ベトナム戦争(1960年～)

ソ連側が支持する北ベトナム vs 南ベトナムを援助するアメリカ(65年～)



1968年のテト攻勢で、北ベトナムの攻撃によりアメリカ側の敗戦色濃厚が国民にバレる
⇒リベラリズムに対する不満が噴出

○古典的自由主義 vs リベラリズム



ベトナム戦争の失敗＝大統領アイゼンハウアーの失敗

≡弱者に優しいリベラリズムの失敗？

逆に戦争に反対していた古典的経済自由主義(ハイエクら) : 右

男女差別、黒人解放運動を掲げる反国家的なラディカルズム : 左

左右両派から挟まれ、圧倒的不利へ

→ Rawls come true!

IV. ロールズの正義論

○公正としての正義

我々はともにルールを作り、社会的協働という枠組みの中で生活

Q. このルールの基準とは？

A. 正義。求められるのが公正さ(fairness)である。 by ロールズ

どのように、基準を公正にすれば皆が同意するのか？ (同意したものが正義)

正義を実現する方法とはどのようなものか？

↓
この問いに答えるのが正義の理論
↓

正義の理論とは、「主要な社会制度が基本的な権利と義務を分配し、社会的協働が生み出した相対的利益の分割を決定する方式」(ロールズ 2010 p.10)

⇒ ロールズの正義論＝公正に分配する方法

○功利主義批判

正義の理論 {
・ _____
・ _____
・ 功利主義 …社会の最大幸福を目標とする ←これは通用する？
・ _____
・ ロールズの正義論 …？

重要なポイント…全ての人がこの原理を正義とみなせるか？

社会全体の幸福が増えたからといって全ての人とその利益を受けるわけではない
むしろそういった理論のもとでは、一生自分の損失が続くような状況におかれる人も出てくる
果たしてこれは正義か？

No. 功利主義は強者の理論である → $\begin{array}{|c|} \hline 8 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 3 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 1 \\ \hline \end{array} = 12 \dots \text{OK?}$
 $\begin{array}{|c|} \hline 4 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 4 \\ \hline \end{array} + \begin{array}{|c|} \hline 2 \\ \hline \end{array} = 10 \dots \text{こちらは?}$

○社会契約説

- * 自然権＝人間が持っている自らの利益を増進するためなら何でもできる権利のこと
- * 自然状態＝そのうえで何も取り決めがない状態

「自然状態は戦争状態である」 by ホッブズ

…人間は利害をめぐって対立し、それが進むと常に争いが絶えない状態となる

↓

毎回争っていれば互いに損 & 身の安全も保障されない

↓

- 1. 互いに自らの利益のためのすべての権利を一度放棄
- 2. 国家というものを作って、その権利を国家に譲けるという契約を行う
- 3. 国家にはルールを定め、反したものには罰を規定する権限を与える

↓

社会契約によって国家が作られ、人々は安全に自己利益の追求が可能

○原初状態と無知のヴェール

ロールズは 自然状態≡原初状態 と置き換えて仮説的思考実験

- * 原初状態…無知のヴェールをかぶっている状態
- * 無知のヴェール…社会における自分の境遇をわからないようにする装置

つまりは

- ①自分の階級上の身分や社会的身分
- ②自分の持って生まれた能力や資産や知性
- ③その他の配分においてどれだけ自分が運・不運を被っているか
⇒自分がどんな状況にいるのかについて全く知らない状態

↓

公正に分配する正義の諸原理が選択される

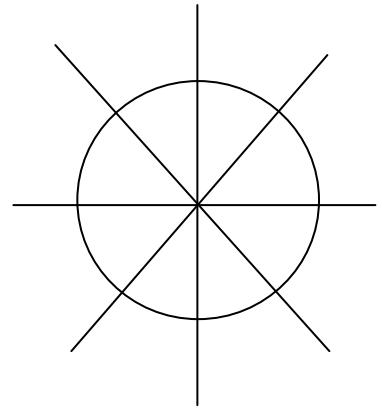
なぜこの状況下で正義は見つかるのか？

↓自分が優遇されているかも分からない

Because 原初状態では、特定の個人を優遇するような策定は行えないので

全員に公正な正義の(分配の)原理が選ばれる

- ex. 自分が金持ち→社会福祉のための課税には反対
金がない →課税に賛成、分配を求める
分からない →公正な原理へ



ではその状況のもとで選ばれる公正な原理とは？

(ケーキの例)

ここに 8.0 人分のケーキがあるとしよう。自分で 7 人前に分ける。

- ① 1.0 人前以下のカケラをとればその人は死ぬ。
- ② 多ければ多いほど金が手に入る(1.0 人前につき1億)。
- ③ ただし、平等に分けると全部で 6.0 人前になる。
- ④ 4 人以下で分けた場合、全部で 10.0 人前になる。
- ⑤ 誰がどれを取るか分からない。

1 人が 2 人前、残りの 6 人が 1 人前という選択が賢明

Because 自分が死なないから

→ 人間はどうなるか分からないとき

自分が最悪の状況におかれていることを仮定して選択するのではないか？



人間は何も分からない状態で分配の原理を選択するとき、
自分が弱者に立場に立って考える



**弱者目線での分配理論こそが、
人びとを公正に扱える人間本来の正義である**

○正義の二原理（正義論 p.402-403 より）

第一原理

各人は、平等な基本的諸自由の最も広範な全システムに対する対等な権利を保持するべきである。ただし最も広範な全システムといっても[無制限なものではなく]すべての人の自由の同様[に広範]な体系と両立可能なものでなければならない。

第二原理

社会的・経済的不平等は、次の二条件を充たすように編成されなければならない。
(a) そうした不平等が正義にかなった貯蓄原理と首尾一貫しつつ、最も不遇な人びとの最大の便益に資するように。
(b) 公正な機会均等の諸条件のもとで、全員に開かれている職務と地位に付帯する [ものだけに不平等がとどまる]ように。

- 第一原理 平等な基本的自由の原理 …自由に対してすべての人が平等な権利を持つ
 第二原理(a) 格差原理 …不遇な人びとが最大の利益を得る(マキシミン原理)
 第二原理(b) 機会均等の原理 …すべての人が平等な機会を持つ
 ※経マキシミン原理…最悪の事態を想定して、その場合でも最低限の損失に抑える

できるだけ格差はないようにする(≠夜警国家)が、
経済成長しないため、完全なる平等も許容していない(≠社会主義国家)
 → 福祉国家を主張

V. おわりに

ロールズは非常に曖昧で、わかりにくい正義という概念を、「人びとを公正に扱うこと」ととらえて紐解いていった。論拠となる原初状態という考え方にも大いに説得力があり、屈指の理論であることは疑いようがない。その中でも特に我々が注目すべきなのは、導き出された結論が今やスタンダードとなりつつある福祉国家という考え方だったことである。提唱されたのはもっと前だが、それに目をつけ強かに論証したという意味で先見性があったといえることができるだろう。

なお、今回は触れていないが、本書は多方面に影響を与えたがゆえに、様々な批判を呼び、後のロールズは微妙に理論を変えることになった。理論の後退とも進歩とも言われており、研究者の中でも意見が分かれている。今後はそれについても個人的に研究していきたいと思う。

【参考文献】

- アダム・スウィフト『政治哲学への招待—自由や平等のいったい何が問題なのか?』
 有賀誠・武藤功(訳)、風行社、2011年。
 アダム・スウィフト、スティーブン・ムルホール『リベラル・コミュニタリアン論争』
 谷澤正嗣・飯島昇藏(訳)、勁草書房、2007年。
 小林正弥『サンデルの政治哲学—<正義>とは何か』平凡社、2010年。
 ジョン・ロールズ『正義論』川本隆史・福岡聡・神島裕子(訳)、紀伊国屋書店、2010年。
 ジョン・ロールズ、エレン・ケリー『公正としての正義再説』田中成明・亀本洋・平井亮輔(訳)、
 岩波書店、2004年。
 仲正昌樹『集中講義！アメリカの現代思想』日本放送出版協会、2006年。
 中山元『正義論の名著』筑摩書房、2011年。
 マイケル・サンデル『これから「正義」の話をしよう』鬼澤忍(訳)、早川書房、2010年。
 森村進『自由はどこまで可能か＝リベタリアニズム入門』講談社、2010年。

【参考 web サイト】

- ウォルツァー『正義の領分』<http://www.geocities.jp/ittokutomano/sphere.html>
 政治哲学の広がり <http://www.tuins.ac.jp/~ham/tymhnt/analysis/7plan/polphiro.html>
 Youtube「Stalin Nostalgia」 <http://www.youtube.com/watch?v=yn7Yh78h>

表1 アメリカ思想史 年表

年	内 容	背 景
1944	フリードリヒ・ハイエク『隷従への道』 刊行	→アメリカ 反共へ
1947	トルーマン・ドクトリン	
1951	ハンナ・アーレント『全体主義の起源』 刊行	→第三世界伸張 ソ連側が援助開始
1955	アジア・アフリカ会議 開催（インドネシア・バンドンにて）	
1958	ロールズ「公正としての正義」 発表	
1960	ハイエク『自由の条件』	1965 年頃～ ベトナム戦争でアメリカが 南ベトナムを支援開始
1963	アーレント『革命について』 刊行	
1968	ベトナム戦争 テト攻勢（ベトナム戦争：1960 年～）	1960 年代後半～ 公民権運動・ 女性解放運動が活発化
1969	ロールズ「市民的不服従の正当化」 発表	
1971	ロールズ『正義論』 刊行	
1974	ロバート・ノージック『アナーキー・国家・ユートピア』 刊行	
1982	マイケル・サンデル『リベラリズムと正義の限界』 刊行	

（出典：報告者作成）

図1 リベラリズムと諸思想における対立軸

